

---

# 学園戦記ムリョウ×フォーゼ戦記ハジメ

ナナシ（仮）

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学園戦記ムリョウ×フォーゼ戦記ハジメ

### 【Nコード】

N6157Z

### 【作者名】

ナナシ（仮）

### 【あらすじ】

2070年の4月下旬、突然事件が起こった。東京都の上空に謎の巨大物体が出現し、東京都を中心に関東近辺のありとあらゆるネットワークを麻痺させてしまった。そんな中、空から巨大ヒーロー、シングウが現れ、飛行物体をやっつけた。そして翌日の朝、政府の広報官が「えー、宇宙人は、実はいました」と言ったのだ。

宇宙人騒ぎで連日大騒ぎになっている中、一人の転校生が転校してきたのだ。すでに廃れた学生服を着て。その名は統原無量<sup>スバルムリョウ</sup>。彼との出会いが、僕、村田始<sup>ムラタハジメ</sup>の運命を大きく変えた。

ムリヨウ君と関わったことで、成り行きでフォーゼに変身した僕は、宇宙人やゾディアーツとの戦いに深くかわっていく。そんな中で、フォーゼの力、シングウの力の秘密が徐々に明らかになる。中学校を舞台としたフォーゼ戦記が今、始まる・・・

## 第1話「2つの戦記、始まる」（前書き）

初めて書く小説なので、稚拙な点がございますので、よろしく願  
いします。

練習として書いたので、本連載はしばらく先になると思います。

## 第1話「2つの戦記、始まる」

2070年の4月下旬、突然事件が起こった。

東京都の上空に謎の巨大物体が出現し、東京都を中心に関東近辺のありとあらゆるネットワークを麻痺させてしまった。

その間、ビルの屋上で一人の老人と学生服を着た少年が巨大物体を見ていた。

「奴めのんきに情報収集ときたもんだ」

「ずいぶん強引な侵略だな」

「奴らにしてみればこんな未開の惑星など・・・礼儀を尽くす意味はないのじゃろう」

と老人はビールを飲みながら言った。

「地球も見下されたもんだ」

と少年が食べながら言う。

そんな中、空から巨大な白い巨人が現れ、飛行物体を不思議な力で破壊した。

「上には上がったのう」

「荒っぽいけどね」

巨大物体を破壊すると、巨人は消えて花びらとなった。

そんな中、地上から老人と少年をじっと見つめる小型ロボットがいた。

「何を考えているんだ・・・」

そうつぶやきながら・・・

翌日の朝、政府の広報官が「えー、宇宙人は、実はいました」と言い、そのため、多くの人々が宇宙人に関心を持つようになった。御<sup>ミス</sup>統<sup>マル</sup>中学に通う少年、村田始<sup>ムラタハジメ</sup>もその一人だった。数日後、各国政府の宇宙人の機密情報が漏洩されるなど、始のクラスで宇宙人で連日大

騒ぎになっている中、一人の転校生が転校してきた。すでに廃れた学生服を着て・・・

スバルムリヨウ  
「統原無量です」

昼休み、校庭で始とクラスメートのジロウ、アツシ、トシオは転校生の無量と話をしていた。

学生服の理由は無量曰く、「じいちゃんからの選別で、どこでも着ていける便利な服だから」らしい。

そんな中、窓から無量を見る一人の中学生の青年がいた。御統中学ミスマル生徒会副会長の一人、守口京一だ。モリグチキョウイチ

昼休み終了のチャイムが鳴ると、5人は生徒総会に行った。

「それでは2070年、5月の生徒総会を始めます」

ツインテールの少女はそうアナウンスした。御統中学生徒会副会長ミスマルの一人、守山那由多だ。モリヤマナユタ

「続いて、生徒会長挨拶」

「はい、宇宙人とか大変ですが大丈夫、ちゃんと体育祭はやります」

「・・・おおー」みず

「新入生諸君も御統中に慣れてきたと思いますので、どんどん発言してください」

そう発言したのは御統中学生徒会長である津守八葉である。ミスマル  
ツモリハチヨウ

「それじゃ、お手元のプリントをご覧ください」

「瞬く〜ん！」

「・・・アハハハハ！」

「はい、ありがとう！」

そう呼ばれたのは御統中学生徒会会計である、アフロ頭の少年の守モリハタシユン機瞬である。はっきり言ってムードメーカーだ。最後に御統中学生徒会書記の、控え目な少女の峯尾晴美が御統中学生徒会のメンバーである。生徒たちや生徒会のメンバーはさまざまな発言をして盛り上がったが、京一だけは無量を時々睨んでいた。

「あのさー、なんつーかー・・・その・・・恥ずかしくないの？」

「え？ああ、服かい？」

「ま、いいけどね」

下校途中、始と無量は話をしていたが、始は少し学生服が不思議なようだ。

「村田君は部活とかしないの？」

「まあね、統原君は前の学校で何やってたの？」

「んー、いろいろ」

「いろいろか、じゃあ、大変だな。うちは部活が盛んだから、来るよ。勧誘が」

と、始が振り向くと、

「とりあえず、俺んちここだからー！」

いつの間にか無量と距離が離れていたことにも驚いた始だったが、始は家の表札が「真守<sup>サネモリ</sup>」だということに啞然とした。

夜、始は家族に無量のことを話した。名字が統原なのに真守の家に暮らす理由が分からず、少し詮索しなくなった始だった。始はその後、妹の双葉<sup>フタバ</sup>とゲームをし、風呂に入った後、宇宙人騒ぎのことを考えながら眠りに入った。周りの人が、大変だという割には落ち着いているという疑問を少し抱えながら・・・騒いでしまっても仕方がないと考えているのが本音だと考えているが・・・

その頃、無量は家でスイッチのようなものを触っていた。

「じいちゃんと真守のばあちゃんとの約束、そしてばあちゃんが俺に託したベルトとスイッチ、運命は今から変化していくのかもな、戦記の始まり・・・か」

そうつぶやき、無量は眠りに入った。

一方、京一は真守の家の前で睨んでいた。

「頑張れ、男の子」

木の上で謎の女性が見ていることにも気付かず・・・

次の日、始は元気に教室へ入ると、無量が京一に連れて行かれたことを知った。その時近くで晴美が始にお願いした。

「お願いです。守口先輩を止めてください！」

場所を晴美から聞いた始は、急いで屋上に向かった。

その頃、屋上で、

「お前、何者だ。お前、あの時あそこにいたな」

京一が睨みながら言った。

「あのとかあそことか、指示語の多い人だな。もうちょっと分かりやすく話したほうがいいよ」

無量は表情を変えずそう言う。

仕方なく京一は、

「この間、東京で宇宙人の侵略ロボットが出た時だ。なぜあんなところにいる」

と返す。

「君もそこにいたのか。奇遇だな。もしかしてロボットの中に乗りながら見ていたのか」

京一はわずかに表情をゆがませ、

「どういふつもりだ！！何を企んでいるんだ貴様らは！！」

「やめろー！！統原君ー！！」

なんとか屋上についた始は、京一が古武道の有段者だということに知っているため、無量が危ないと考え、止めに入ろうとした。しかし・・・

「危ない！！」

と無量が叫んだ。その時、京一から不思議な力を無量にぶつけたが、無量はガードした。



その力の余波で始が吹き飛んでしまった。無量は始の手をつかんで始を助けた。

「何しに来たんだい」

「転校生には親切に。ま、とりあえず学級委員だからね」

無量は京一の目を見ると、

「チカラの大きさはいい線いつてるね。でも、使い方は下手だ」と、無量は不思議な力を球体にし、それを京一にぶつけたのだ。

「何者だ！貴様！」

京一はそう叫び、

「教えてあげよう。チカラの本当の使い方を」

無量はそう言い、ポケットから2と4の数字が刻まれた、2種類のスイッチを取り出し、京一に向ける。

京一がスイッチを見て驚き、

「貴様！なぜそのスイッチを持っている！」

その様子を見た始はこうつぶやいた。

「何だ、こいつら・・・」

t o b e c o n t i n u e d . . .

## 第1話「2つの戦記、始まる」(後書き)

感想よろしくお願いします。また、応援よろしくお願いします。次回予告は本連載のときに書きます。いろいろとアドバイスもお願いします。

## 第2話「ムリヨウのチカラ×フォーゼのハジメ」(前書き)

1話を試験公開するつもりでしたが、マグネットステイツまでなら書けそうな気がするので、試験公開する話数を増やしたいと思います。

## 第2話「ムリヨウのチカラ×フォーゼのハジメ」

「貴様、その2と4のスイッチ、真守のスイッチだろ！なぜ持っている！」

京一がそう叫ぶと、無量は、

「なぜって？真守さんが貸してくれたんだ」

「そんなホラ話、誰が信じるか！第一、貴様がそのスイッチを使えるわけないだろ！」

「何なら、試してみる？」

そう言いと無量は、左手で4番のスイッチを押した。

『レーダー・オン』

すると無量の左腕にレーダーのようなものが出現した。

「なっ！」

「えっ！」

始と京一は同時に驚き、さらに無量は右手で2番のスイッチを押した。

『ランチャー・オン』

すると無量の右腕の周りに小さな弾が出現した。

「ターゲット・捕捉、発射」

無量はレーダーで京一に狙いを定めると、右腕の弾で京一を撃った。  
「なにっ！」

京一は急いでチカラで防御し、弾を防いだ。

「本当の2番のチカラなら、今の君の防御では防げない」

「統原ううう！」

京一は再びチカラを使い、無量にぶつけたが、無量はまたもそれを無効化した。

「君、気持ちを集中させないとだめだよ」

「くっ、うおおおお！」

「ごめん」

「うわっ、いて！」

京一の突進を回避するため、無量は始を軽く押して転ばせ、ふわりとよけた。

「君はそっちのほうが好きなんだね」

「何っ！」

「チカラみたいなまどろっこしいものでは、自分の強さは測れない」  
「知った風な口を利くな！」

今度は無量は再びチカラを球体にし、京一に向けて飛ばした。しかし、無量はわざと京一に当たらないように飛ばした。

「チカラは頼るものではないよ。使いこなせる、己の器を測る物」

「黙れっ！」

すると無量はどこからか不思議なベルトを出現させた。

「そのベルト、使わせるかあ！」

京一は無量の懐に入り、ベルトを奪おうとした。しかし、ベルトは京一をはじき、宙を舞い、始の体に触れてしまった。

「うわ！うわ！」

「やばい！」

不思議なベルトは始の体に触れると、いつの間にか消えてしまった。

「えっ……」

「こらあ、なーにやってんだあ、予鈴はとくに鳴つとるぞお！屋上でドンガラドンガラうるさいよお！」

屋上に始や無量たち2年C組の担任である、山本先生がいきなり出てきた。晴美やジロウが先生を呼んできてくれたのだ。山本先生に注意されたため、3人は仕方なく自分の教室へ行った。

一方、別の屋上では、八葉と那由多が一部始終を見ていた。

「あのベルトに触れてしまったか……」

「まずいよ。あいつは何も知らない」

「……」

那由多は屋上に自分のチカラでカギをかけ、屋上に来る野次馬を抑えていた。

始は先生に無量と京一が超能力で戦っていたといっても信じてもらえないと考えていたため、その事実を心の中にしまい、授業を受けた。しかしながら、先ほどのベルトが少し気にかかっていた。

始たちは昼休み、校庭で朝の出来事を話していた。しかし始は超能力のことをはぐらかした。上の階から那由多は始を見ていた。朝の出来事が引っ掛かっているらしい。一方、無量は山本先生に呼ばれていた。

「困った奴だなあ、守口も守口なら、お前もお前だ。・・・で、見られたんだな。村田に」

「はい」

「弱ったなあ。お前ら同士でやりあう分には・・・いやあ、やりあう分にも問題だが・・・村田は無関係だからなあ」

「彼ならば、大丈夫じゃないですか」

「どうしてそう言える」

「だって、学級委員ですから。それに・・・彼なら」

「そう思っただけで村田にベルトを渡したんだろうが。自分が変身するふりをして、守口が止めに入ることも計算して」

一方、京一は、

「どうしてだ！なぜ人を呼んだ！」

晴美に朝の出来事を問い詰めていた。しかし、京一はそれ以上に、

「それよりも、何故俺を見張る。誰に言われた！」

「・・・言われてません。言われて・・・ません」

「・・・何故お前は！」

「やめろ京一」

「八葉・・・」

突然八葉が京一と晴美の前に現れ、晴美はそのすきについて悲しん

だ顔をしながらその場から逃げ出した。

「それよりも、見られたのはまずかったな。2年C組の村田とか言ったな。あの眼鏡の子。おまけに真守さんどこにあるベルトに触れてしまった」

「・・・責任はとる。今はあのベルトをどうにかしないといけない。あれは・・・」

始と無量は一緒に下校していたが、朝の出来事と、無量についての秘密も知リたかったため、無量も始の心情を理解し、自分の家に誘った。表札は「真守」だったが、中に入ると「無量庵」と書かれた家があった。そこが無量の家だった。するとなかには・・・ピンクの服を着た女性が寝ていた。昨日の夜、京一を見ていたのは彼女だった。

「どうぞ」

「今更猫かぶつてもだめだぞ」

「うっさいな」

スバル センナ

先ほどのピンクの服を着た女性は無量の姉、統原瀬津名である。彼女は大学生で、東京で暮らしていて、無量は一人暮らしをしていた。瀬津名のせいで調子が狂い、始は無量に聞きたいことがなかなか言えなかった。無量はそれに気づき、始が聞きたいことを言うように言った。無量は朝の出来事を聞くのかと思っただが、最初に始は家が真守で何故名字が統原なのかを聞いた。結局理由は単に無量は真守の家に下宿させてもらっているだけだった。下宿させてもらっている理由は無量のお祖父さんと真守のお祖母さんとの約束らしく、無量が14歳になったら来るように言われていたためであった。始は真守の家がものすごく立派な家だったということを知らず、4年前に引っ越して天網市に來たと無量たちに伝えた。すると、無量は、「君は何も知らないんだ。この天網市のことを」

「えっ」

「いいよ無量。教えてあげなさい。この子なら大丈夫かもしれない。この子にくつついたベルトのことも」

すると突然空気がゆがむと、無量と瀬津名はそれに気づき、

「ちようどいいや。見に行こう」

一方、海に巨大な物体が出現した。始と無量と瀬津名はそこに向かうと、

「あれは？」

「宇宙の侵略兵器」

「そしてあれは・・・正義の味方しゅつつげーん！」

すると空間がゆがみ、白い巨人が現れた。4月下旬に巨大ロボットを破壊したのと同じである。

侵略ロボットは白い巨人に光線で攻撃し、巨人は海に落ちたが、浮上した。ロボットは連続で光線を放ったが、巨人はそのまま前進し、ロボットをつかみ、チカラをぶつけようとしたが、ロボットはとつさに分離し、電撃で巨人に攻撃し、巨人を戦闘不能にさせた。

結局、そのロボットは逃走し、別の空間へはいって行った。

「仕方ないよ。あれはまだ力押ししか知らないんだから」

そして、巨人は消えて花びらとなった。

「まずはよかったよ。無事で」

そうお祖母さんは言った。何か巨人について知っている様子だった。振り向くと、晴美を除く生徒会メンバーが始をじっと見て、そのままだどこかへ行った。

「さて、どうする？何から説明しようか？」

「ははっ・・・なかなかリアルな巨大バトルは刺激的だったからね。

明日にしてよ」

「お姉さんからのアドバイス。ここしばらく、夜寝るときは靴履いたほうがいいよ」

「あと、このスイッチも渡しておくよ」

それは朝、京一との戦いに使用した2と4の数字が刻まれたスイッチ



チだった。

夜、始は、朝の出来事と巨人の出来事、スイッチについて考えていたが、スイッチについては結論が出なかった。なんせ2番のスイッチは危ないから触らなかつたが、4番のスイッチを触っても無量みたいにリーダーが出なかつたのだ。これでは何も分からない。しかし、天網市の一部の人々は巨人や宇宙人について何らかの関係があるということに落ち着いた。

夜中、始の部屋に突如仮面の戦士が侵入し、始に襲いかかった。始は瀬津名のアドバイス通り、靴を履いて仮面の戦士の腹を蹴り、そのすきに外へ出て仮面の戦士から逃げた。仮面の戦士は始を追い続け、始が公園に着くと、仮面の戦士は不思議なチカラで始を拘束し、変わった杖で始に何かしようとした。

「なにすんだ・・・やめろ・・・だれか・・・だれか助けてくれ！」その時始の体からベルトが出現し、杖に攻撃して破壊した。

仮面の戦士はひるみ、始はベルトを装着した。すると、ベルトには二つのスイッチと二つの穴があつた。始はすぐに無量から受け取つたスイッチを二つの穴に差し込み、ベルトに操られるようにレバーを引き、右腕を空にかざした。すると、始は、白いボディに赤い目の戦士に変身した。

「・・・フォーゼ」

そう仮面の戦士は呟いた。

「フォーゼ？」

始は疑問に思うと、仮面の戦士は始にフォーゼに攻撃した。

「うわ！？うわあー！」

フォーゼはわけがわからぬまま、背中のブースターを利用し、仮面の戦士の攻撃を器用によけていた。

今度は仮面の戦士はチカラをフォーゼにぶつけようとすると、どこからともなく無量がフォーゼを守り、チカラをごみ箱に向けた。チ

カラを受けたごみ箱は圧縮され、小さくなってしまった。

「統原くん！」

「村田くんかい」

「どうして・・・」

「いいから。器物破損。君はむやみにチカラを使っちゃだめだ。まだあのフォーゼはそれほど強くないのだから」

すると無量は空を見て、

「あーあ、言わんこっちゃない」

空から等身大の幾何学的なロボットが1体、オリオン座の星座が刻まれた怪人が1体落ちてきた。

「・・・ゾディアーツ」

そう呟き、仮面の戦士はチカラをロボットとオリオン座のゾディアーツ、オリオンゾディアーツに向けてぶつけたが、効果がなかった。ロボットは仮面の戦士を、オリオン・ゾディアーツはフォーゼにそれぞれ攻撃した。しかし、無量はロボットにチカラを至近距離でぶつけ、機能停止させた。

「これも、器物破損だね・・・村田くん、まず4番のスイッチでゾディアーツを捕捉して」

「えっ、でも統原くん見たいに使えなかったよ？」

「その姿でなら使えるはずだよ。やってみて」

「わかった！」

『リーダー・オン』

するとフォーゼの左腕にはリーダーが出現した。

「そして、次は・・・」

「2番のスイッチ！」

『ランチャー・オン』

するとフォーゼの右足にランチャーポッドが出現した。

「ターゲット・捕捉、発射！」

ランチャーポッドから発射されたミサイルは全部ゾディアーツに命中した。ゾディアーツがひるんだ瞬間、始は2番のスイッチを解除

し、

「次は1番のスイッチ、右腕のスイッチを使って」

『ロケット・オン』

今度はフォーゼの右腕にロケットが出現した。

「なにこれ〜〜〜」

フォーゼはロケット噴射に振り回されながらゾディアーツに近づき、空中にゾディアーツごと飛んで行った。

『次はそのまま3番のスイッチ、左足のスイッチを使ってゾディアーツに向けて』

「統原くん！どこから・・・」

『ドリル・オン』

フォーゼの左足にドリルが出現し、それをレーダーで捕捉しながらゾディアーツに向けた。

『次に右のレバーを引いて。その後スイッチを回収して』

「スイッチ!？」

『ロケット・ドリル・レーダー・リミットブレイク』

「うおおおおお!」

ライダーロケットドリルキック、この技を食らったオリオンゾディアーツは爆発し、フォーゼはスイッチを空中で回収した。そして、公園で、

「統原くん。これは・・・」

「ゾディアーツスイッチ。やっぱラストワンになっていたか・・・」

「あの怪人のスイッチ!？」

「そのスイッチを押して。それでそのスイッチは消えるから」

「うん・・・」

スイッチを押すと、ゾディアーツスイッチは消えた。フォーゼは変身を解除し、始に戻った。

「靴履いといてよかったろ」

「うん・・・」

「じゃあ、また明日って今日だけど」

気がつくとき計の時間は2時を過ぎていた。さらに、仮面の戦士と無量はすでにいなくなっていた。始はそのまま帰った。

しかし、一部の住民はその光景と始を見ていた。

「フォーゼが・・・復活した」

「そろそろ・・・かもな」

「真守さんに伝えなければ・・・」

「村田さんがフォーゼ・・・吉と出るか凶とでるか・・・」

「私たちは・・・フォーゼになれませんから」

学校で、夜中の事件の影響で始と無量はかなり眠たく、あくびをしていた。始は無量にフォーゼのこと、天網市のことについて聞きたかったが、どちらも眠く、それどころじゃなかった。しかし、御統中学の外から黒服のサングラスをかけた男が校舎をじっと見ていた・  
・  
・  
・

t o b e c o n t i n u e d . . .

## 第2話「ムリヨウのチカラ×フォーゼのハジメ」(後書き)

2話目にしてフォーゼ登場です。しかしながら、原作と違ってスィッチはまだ4つしか使えません。5話分まで書いて、それを試験連載としたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6157z/>

---

学園戦記ムリョウ×フォーゼ戦記ハジメ

2012年1月5日20時54分発行